



Title	「モダニズム出版社の光芒 プラトン社の1920年代」： プラトン社の雑誌デザイン
Author(s)	西村, 美香
Citation	デザイン理論. 2001, 40, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53101
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「モダニズム出版社の光芒 プラトン社の1920年代」

— プラトン社の雑誌デザイン —

西村美香

1920年代は日本にモダニズムの波が押し寄せ、ようやく大衆のレベルにおいても西洋文化が浸透し始めた時代であった。日常生活にどうにか合ったかたちで咀嚼されだした西洋文化は、生活改善運動や都市概念の形成といったかたちで具現化した。生活への改善提案というかたちの新しいデザインが希求された一方で、都市のインフラ整備が構築されだしたのである。

大阪では1921（大正10）年に第一次市域拡張計画が施行され、道路や交通網の整備と共に本格的な建築ラッシュが始まった。それに1923（大正12）年に起きた関東大震災も一因して、関西への人口流入はいっそう増加した。東京の企業が多数、大阪に進出したのもこの頃であった。1925（大正14）年の第二次市域拡張計画では44町村が合併され、大阪はついに人口211万人からなる日本第一の都市となった。経済的にも活況を呈した大阪が、「大阪」と呼ばれたのはまさにこの時期であった。

プラトン社はこうした発展しつつある大都市大阪に出現した出版社であった。その活動は1922（大正11）年の5月から1928（昭和3）年の5月までとわずか6年間ではあったが、その短い期間に出版された雑誌は出版史上のみならず、社会学的見地そしてデザインの側面からも注目すべき存在であった。それらは『女性』（1922.5～1928.5）、『苦楽』（1924.1～1928.5）、『演劇・映画』（1926.1～1926.8）という3つの雑誌である。それぞれに総合文芸雑誌、大衆娯楽雑誌、映画・演劇専門雑誌と分類されているこれら雑誌は、

その内容もさることながら、表紙絵や誌面に用いられたカット、挿絵のすばらしさには目を見張るものがある。現在これらイラストレーションは、幾多の書誌で日本のアール・デコ、あるいは1920年代を代表する小説挿絵であるとの評価を得て紹介されている。

化粧品会社である中山太陽堂（現クラブコスメチックス）を後ろ盾として創設された出版社プラトン社は、その雑誌デザインを、主として太陽堂から出向した図案家山六郎（1897～1982）と新人として雇い入れた山名文夫（1897～1980）の二人に担当させた。山名はその後、資生堂に入りデザイン基調をつくったデザイナーとしてもよく知られている。この二人に加えて、幾人もの図案家（前田貢や橋文二ら）や当代流行の挿絵家たち（伊東深水や小田富彌、竹久夢二ら）あるいは新人たち（岩田専太郎や竹中英太郎ら）がかかわり雑誌のビジュアル部分は形づくられた。

彼らの誌面での活躍は、様々な変化に富んだ作風を通して、読者の目を多いに楽しませてくれる。今日においても、多くの書物や研究書で彼らの仕事や作品が取り上げられ、論じられているのは周知の通りである。しかしそれらに対する評価はデザインの見地からすると必ずしも得ていないよう思われる。存外、造形的には安易に扱われ、その分析の結果、正当性に欠ける評価が下されているようを感じるのである。それは、その多くがデザインの分野外の研究者が下したものであったり、あるいは特定の作家（夢二やビアズレイ）よりの研究分析の結果得られたものであったりするということに起因する。それらは山

や山名の作品に通り一遍、目を通しただけで、プラトン社での彼らの仕事を総合的に判断したものではない。その評価のおおむねはこうだ。——ビアズレイばりの優雅なイラストレーション——。

ビアズレイ（1872～1898）はいわずと知れたアール・ヌーボーの高名なイラストレーターである。確かに山や山名それに『苦楽』誌上から輩出された幾人かの挿絵画家、例えば岩田専太郎（1901～1974）らにはビアズレイの影響が少なからず見られる。しかしそれは一部であってすべてではない。わずか6年間の出版活動ではあったが、その間に彼らは様々な試行錯誤を重ね、模索する中で自らの作風を極めていくと努力している。ビアズレイはそれまでの変遷の断片にすぎない。彼らの作風あるいはそれによって形成されたプラトン社の雑誌デザインはビアズレイのみにとどまるのではない。フランスのファッショントレートやロシア構成主義、ダイナズム、フォト・モンタージュなど、など、1920年代の息吹をどん欲に吸収し、その結果形づくられたものであった。

そしてまた彼らの活動はこうした西洋の模倣のみに始終したのでもない。彼らは西洋のものまねや技術の習得に始終していた修練ともいえる時期を終え、大正期のわが国に、女性をめぐって起りつつあった新風俗や新文化にいち早く呼応して、それを目に見えるかたちに置き換えた新奇性あふれる作風を作りだすことに成功した。それこそ1920年代日本の、大衆が自分たちで享受できる新たな文化の形成であった。雑誌というメディアにのって新しい時代の到来を告げる情報を彼らはビジュアル・デザインという形で発信はじめたのである。

「ビアズレイばり」（つまりアールヌーボー様式）と称されながらも日本のアール・デコ

に位置づけられている彼らの作風に対する評価の矛盾を見極めることを皮切りに本発表は始まる。そして「彼らが己のイラストレーションの源泉としたものは何か」をキー・センテンスに、プラトン社の三雑誌の誌面に登場する挿絵・カット・広告そしてそれらのレイアウトに至るまで、編集デザインのすべての分析を試みた。こうして三雑誌の全貌を明らかにすることで、1920年代日本のデザイン状況の一端をかいま見ることができると考える所以である。

調査研究は、以上の項目に整理して行った。

1. 『女性』表紙とファッション・プレート
2. 山六郎と山名文夫
3. 『女性』題字ロゴと図案文字
4. イラストレーションの美女たち
5. 『苦楽』表紙とモダン・ガール
6. 『苦楽』が育てた挿絵画家
7. 広告と編集デザイン
8. 日本のアール・デコ様式の形成



「モダニズム出版社の光芒 プラトン社の1920年代」(淡交社)
小野高裕・西村美香・明尾圭造 著